

被災地とアジアつながる



24日、バンコクで、詩を朗読し防災教育の大切さを訴える菅原彩加さん＝伊東誠撮影

尊い命を守るための防災教育。被災地に再び希望をもたらすため、国、人種、言語を越えて助け合う世界。

【バンコク＝伊東誠】東日本大震災で母親ら三人の家族を亡くした菅原彩加さん(21)が二十四日、タイの首都バンコクで開かれたアジア防災閣僚級会議の分科会で、詩を朗読し防災教育の大切さを訴えた。

「自然災害がおきた時、尊い命を守るための防災教育。被災地に再び希望をもたらすため、国、人種、言語を越えて助け合う世界。その夢に向かって歩きます」

「僕たちの未来」と題した詩。分科会では震災で被災した四人

家族亡くした石巻の女性

バンコクで詩を朗読

とタイ、ネパール、インドネシアの若者と朗読劇を披露。最後に菅原さんが英語で詩を朗読し、二百人の参加者は聞き入った。

宮城県石巻市の中学三年生だった菅原さんは自宅で強い揺れに襲われ、家が津波にのみ込まれた。流れ着いた先はがれきの山。そばに足を踏まれた母理子さん(当時3歳)がいたが濁流は勢いを増し、祖母、曾祖母とともに帰らぬ人になった。

半年後、震災遺児らを支援する民間団体を通じて、世界の政財界のリーダーが集まる夏季ダボス会議に参加するなど、これまで五十回、被災体験を伝えてきた。震災後に留学したスイスの高校を今年卒業した菅原さんは「若者が真剣に防災を考えていることを知ってほしかった。防災の仕事に携わる人も頑張っ

て、とのメッセージも込めました」と話した。